

第288回山口西田読書会（＝2021年11月6日開催分）のプロトコル

佐野之人記

1. テキスト：「場所」「二」の第2段落。232頁5行目から9行目まで。
2. テキスト講読

まず「対立的無も尚一種の有なるが故に、意識作用には断絶がある、昨日の意識と今日の意識とはその間に断絶があると考えられる」と述べられる。「断絶」が有としての無（眠っている間）である。昨日一日は昨日一日を生きるという目的で一貫しており、今日も同様である。あるいは同じ目的を数日間、数か月間という長い間持ち続けるならば、同一の意識と考えることもできる。しかしそれらはいずれにしても特定の目的の実現過程であり、目的と目的の間に断絶がある。

次いで「真の無は対立的無をも越えて之を包むが故に、行為的主観の立場に於て昨日の我と今日の我とは直に結合するのである」と述べられる。「行為的主観の立場」は「真の無」に包まれた立場であるから、「絶対的無の場所に於て真の（状態としての：引用者）自由意志を見ることができる」と言われた立場である。それは個々の目的（善）や、悪と対立する善そのもの、あるいは〈人格〉や〈真の自己〉（叡智的実在）を追求する意志作用の立場ではない。これらはなお「対立的無の立場」である。こうした立場に躓く所で、「真の無は対立的無を越えて之を包む」のである。ここにおいて上述の〈アウグスティヌスの達観〉が成就し、「状態としての自由」を見るのである。「真の無」に包まれた場所は生死を貫いたものであり、そこに「断絶」はありえない。それ故「昨日の我と今日の我は直ちに結合する」のである。しかも両者は生滅の場において直ちに（つまりは即非的に）結合するのである。

「かく考えられる意志は原因がない」。何らかの目的を動機とする他律的な意志ではない、ということであろう。そのような意志はここではすべて崩れてしまっているのである。のみならず、それは「それ自身に於て、永遠でなければならぬ」とされる。その理由が以下に述べられる。